

大阪掖済会病院の歴史探求

—ええで大阪、好きや大阪—

大阪掖済会病院
さわだ てつじ
院長 澤田 鉄二



—大阪掖済会病院の創立と当時の大阪—

江戸時代の大坂（現大阪）は、全国から物産が陸路や航路を通じて集まり取引され、天下の台所と呼ばれ、張り巡らされた水路に架かる橋の多さから、大坂八百八橋、水の都（水都）と言われておりました。明治元年には大阪では長い鎖国の状態から、川口（現病院から北約400mの宇治川沿い）で最初に開港が行われました。大阪開港の地となると同時に、この川口に外国人居留地が設けられ、当時は洋館が立ち並んでいたようです。

明治期に開設された松島の盛り場（現在も病院の西に松島新地として当時の面影を残す）と川口波止場の開港は、後背地の九条が「西の心齋橋」と称されるほど賑わいをもたらしました。しかし川口波止場は河川港で手狭であるため、その後明治36年（1903年）には大阪湾に面するところの築港（現在の大阪港／天保山）に新しい港が建設されました。新旧の港、川口と築港を結ぶみなと通（現病院に面する通りとして現存）には、同年に大阪市電、花園橋（現在の九条新道交叉点、病院から約300m南、大阪市電発祥の地）から築港栈橋（天保山）まで5.1kmの築港線が開業しました。

明治38年12月に、旧港である川口から新しい港を結ぶ通り、「市電のりば」の近く西区本田町通りに大阪海員寄宿所・大阪事務所が建てられ、一部海員の診療も行っていたようですが、その後大正2年（1913年）11月に大阪市西区本田町通1丁目（現病院のほぼ近く）に海員診療所が開設されました。大阪掖済会病院の起源は、この診療所開設をもってスタートとしましたので、平成25年（2013年）11月で創立100周年を迎えたこととなります。大正4年2月に診療所を拡張し、大阪病院としての診療を開始（写真1）、明治29年開業の横浜、明治35年の長崎、門司の開業に次いで掖済会グループでは4番目に古いですが、神戸病院は大正3年11月に病院として開業されていますので、病院としては5番目になります。

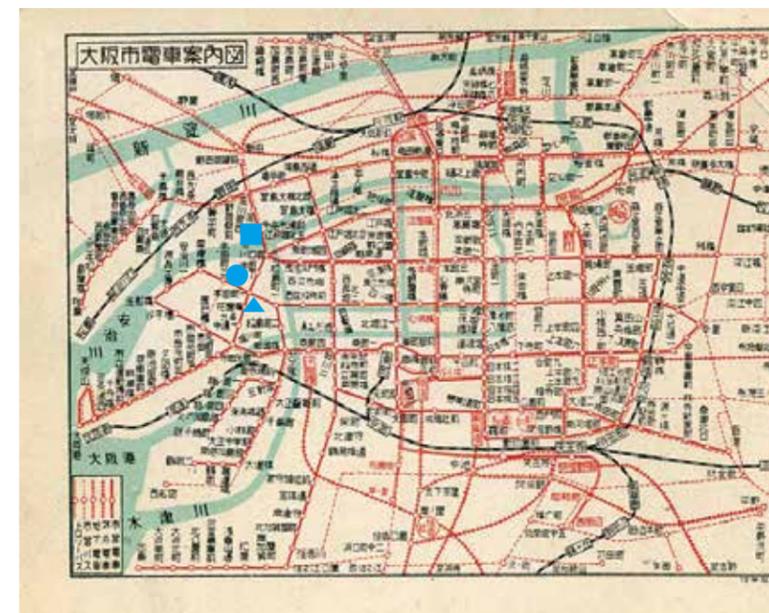
今では病院周囲には港の面影もなく、市電が走っていた痕跡もなし。以前は近くに中華街もあり、横浜、神戸のよ



大阪病院（左）・大阪出張所（右）（大正4年）

うに中華料理屋さんが多数軒を並べていたようですが、現在ではみなと通りを挟んだ向かいに古い中華料理屋（一見営業されていないようにも見えますが、最近は時に食べに行きますが老舗で、味はまずまずです）を1軒残すのみで、外国人居留地の痕跡も見当たりません（最近は民泊を利用する外国人を病院周辺で見かけますが）。

しかし当時は、旧港の川口から新港の築港、天保山を結ぶみなと通りを市電がひっきりなしに走り、多くの人と情報が集まるビジネス拠点となり、大正から昭和初期にかけて船会社、倉庫会社、銀行等が競うようにビルディングを建設し、病院周囲、本田や九条界隈は非常に賑わっていたようで、港湾近く、海員のためにと海員掖済会の趣旨として、なぜこの地に大阪病院が設立されたのかが理解できるのではないのでしょうか。



昭和初期の大阪市電
路線図

- 大阪掖済会病院
- 大阪開港の地、川口居留地
- ▲大阪市電発祥の地

大阪の市電は、その後も市街地を東西南北に結ぶ路線として拡充され（写真2,3）、市バスやトロリーバスと共に市民の足となっていました。昭和35年頃より自動車の増加による渋滞が常態化し、市電も遅延が慢性化、乗客が減少し、昭和44年3月に65年の歴史を終え、廃止されました。幼少期には私自身もこの市電を利用したこともあり、懐かしい記憶として残っています。現在の病院は地下鉄の最寄り駅から若干距離があるため、不便さを言われることもありますが、当時市電が走っていた頃对患者さんにとっては便利であったことだろうと思います。情緒もあって、良かったのにな。残念。



昭和初期の大阪市電 難波高島屋前を走る

—空襲による全焼からの復興—

大正4年の病院開設から、大正7年には看護婦養成所も付設され、開業当初内科、外科のみであった診療科も、大正12年には小児科、眼科、皮膚科、耳鼻科等を加え増築、昭和3-4年にかけて更なる増築が行われ、順調に発展していました。



大阪空襲全焼後に大阪病院再建（昭和26年）

ところが、第2次大戦中の昭和20年3月の大阪大空襲により、病院および看護婦養成所は両方を全焼で失うこととなりました。しかし、すぐに仮診療所を再開、近隣の空襲で焼失を免れた病院を買収し、昭和20年5月には大阪病院としての業務を再開したものの、同年6月には再び空襲を受け全焼、再度の悲運に見舞われました。終戦後は仮診療所としての診療を継続していましたが、昭和24年に旧病院焼跡に診療所を新築し再出発、昭和26年3月に病床24床をもって大阪病院として再発足されました（写真4）。写真では、恐らく現在の病院の近く、同じくみなと通りに面しており、病院の前を市電の架線が走っているのが見受けられます。その後、昭和28年には31床に、昭和37年には92床に増床、改築されました。

—大阪市立大学関連病院として現新病院までの発展—

昭和49年8月に本館を大阪市西区本田2丁目（現病院の隣）に新築、130床の旧病院となりました（写真5）。昭和49年といえますと、大阪万博が終了して4年が経過、私が中学3年生の時であり、勉強嫌い、到底名だたる高校など受かる由もないと言われていた頃でありまして、現在の医師に進むなどは夢にも思っていなかった頃であります。私が昭和60年に大阪市立大学を卒業後、第一外科に入局したのは、当時教授であった恩師梅山馨教授に憧れてであり、梅山先生は昭和48年に第一外科の教授に就任されましたが、翌昭和49年同門の川田普亮院長が第8代の院長に就任されており、以後梅山教授、川田名誉院長のご尽力により、大阪掖済会病院は、内科、外科を中心として大阪市大関連病院として現在まで継続、発展してきました。現在もほぼ全診療科が、市大各診療科教室より関連施設として医師が派遣されています。梅山教授は残念ながら一昨年にご逝去されましたが、それまで体調不良の際には必ず大阪病院を訪ねて来られ、利用して頂きました。



旧大阪掖済会病院（昭和49年～平成17年）本館

その後昭和61年150床に増床、平成4年までの18年間川田院長の時代が続き、平成4年8月から青木豊明先生が第

9代院長となりました。そして平成14年8月、現在の病院の新築工事が始まり、平成17年2月に現在の新病院が完成、同年7月から11階建て、135床、介護老人保健施設（えきさい大阪）を併設した現在の新病院として生まれ変わりました（写真6）。平成25年11月には、創立100周年も無事迎えることができ、これも偏にこれまで永らくご支援を頂きました地域住民の皆様、地域連携医の先生方のお陰と感謝申し上げますと共に、これまで継続されてきた大阪病院の職員、諸先輩方々ならびに本部、掖済会グループ病院の皆様のご尽力、ご協力の賜物と、深く敬意を表します。

—大阪病院の現状とこれから—

現在の病院を取り巻く医療情勢、環境は非常に厳しいものがあります。中でも大阪病院は周囲に多くの競合病院があり、その中でこれからも生き残っていくためには特色が必要となります。私が第12代院長に平成26年7月に就任してから、翌年には整形外科を切断指接合を中心とした手外科・マイクロサージェリーセンターとし、また昨年からは消化器内科を増員し、吐下血を含む緊急内視鏡に対応できる救急体制の整備等診療体制の変更を行いました。これらは診療内容の特色を生かすための改革ですが、当院の何よりの特色は100年以上継続してきた歴史であり、「ええで大阪、好きや大阪」、職員みんなの「掖済の心」、思いやりの医療がしっかりと患者さんへ伝わって来たからこそ、現在まで継続できたと思います。またこの思いは、今後も患者さんへ伝わり、通じるものと信じています。今後もその昔、港と共に賑わい栄えた病院を維持すべく、100年以上継続したこの大阪病院の歴史を、次の世代へ、自分たちの手でバトンタッチし、次の新しい100年へ繋げなければなりません。その時々の変化に応じた対応、改革が必要であることは確かですが、この重責を担いながら、今後も努力を重ね、現職員と共にさらなる発展をめざして行きたいと思います。



—現在の病院概要—

(1) 病院の理念

掖済の心で思いやりのある医療を実現します。

(2) 基本方針

- ◆医学・医療の進歩を取り入れ、「根拠に基づいた医療」の実践で、良質で公正な医療を提供します。
- ◆説明と同意の充実を図り、患者さんの人権を尊重した安全で安心できる医療を提供します。
- ◆地域住民の医療・介護・保健・福祉に貢献するために、地域医療機関との連携を強化し、地域医療の一端を担います。

(3) 病院概要（平成 29 年 10 月現在）

■診療科目

内科、消化器内科、循環器内科、糖尿病・代謝内分泌内科、小児科、神経内科、外科、消化器外科、整形外科、眼科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科、

人工透析内科、手外科・外傷マイクロサージャリーセンター、内視鏡センター
人間ドック・健康診断センター

■病床数 病院（急性期一般病棟：3病棟）135床

（付設 介護老人保健施設 100床）

■その他設備など

手術室 3室、全身用コンピュータ断層撮影装置 64列マルチスライスCT、全身用磁気共鳴診断装置MRI 1.5テスラー、多目的IVR専用血管撮影装置、X線骨密度測定装置、腹部超音波装置、心臓超音波診断装置、上部・胆道・下部内視鏡システム、マルチカラーレーザー装置、YAGレーザー装置

■基準

入院基本料 看護配置 7対1
DPC 対象病院

